

妻 夫

居間。小さなテーブルを挟んで椅子にかける夫婦。

二人は短くはない旅を終えて寛いでいる。テーブルの上には二つのコーヒー茶碗、そして夫は新聞を読み、妻は編物をしながら。

夫 ああ、これだ。

妻 何？

夫 遊園地が閉園になるって。ほら、大きな池の。

妻 ああ、あの遊園地。

夫 もう遊園地なんて、はやらないんだよ。

妻 そうね。私たちはよく行っただけ。

夫 子供たちは小さかったし、いつも僕たちと一緒に遊んでいた。

妻 みんな遊園地が大好きだったわ。

夫 遊園地に行く日は何だか楽しかったよ。遊園地っていいよ。一日中いてもあきなかったよ。

妻 あひるの池でお弁当を食べて、それからみんなでメリーゴランドに乗ったの。覚えてる。

夫 覚えてるさ。僕の馬は後ろから君や子供たちの馬を懸命に追いかけるんだが、いつも最後まで追いつけないんだ。

妻 それから丘の上の大きな観覧車。いつもゆっくりと夢の時間を回している。まるで空の上の水車のよう。

夫 ジェットコースターなんかもあったよ。

妻 あれはダメよ。

夫 そうかな。乗ったことがないからわからないじゃないか。

妻 わかるわよ。乗らなくなつて。それより貴方がいつもお気に入り。の乗り物があつたじゃない。

夫 子供たちも大好きだったよ。あれは、なんて言ったかな。

妻 「かもめの艦隊」。

夫 そうだよ。でも、不思議だよな。かもめの艦隊って只のモノレールの乗り物だったろ。

妻 乗り物というより自転車ね。モノレールの自転車。
夫 それで、ゆつくりと遊園地の中を回るだけなのに。どうしてあんなのが僕らには面白かったんだろつ。
妻 それはね、あなたが少しだけ空を飛べたからよ。
夫 少しだけ？
妻 そう、そんなに高い空じゃない。といって地上よりは少し高い。ほら、かもめの艦隊って、ちょうど遊園地の建物より少し高いところを進むじゃない。だから、ちょうど屋根の上を飛んでるように思うのよ、そんなに高くはないし、そんなに低くない。
夫 屋根の上か。確かにそうだ。僕にはいつも、どこかの町の上を散歩しているように思えたんだ。
妻 それにあれば自分でペダルを漕いで進むでしょ。何だかふらふらした感じで。ほら、今ちょうど私の上を飛んでいくわ。私が手を振っているのあなたたつたらいつも知らん顔してたじゃない。
夫 知ってたよ。君はいつも僕や子供たちが空中を散歩しているのを、嬉しそうに見ていたよ。
妻 私も乗ればよかったわ。あなたや子供たちだけいい思いをして、私はいつも下で待つてるだけ。ばかなことをしたわ。
夫 君だって乗ればいいじゃないか。ほら、乗ってごらんよ。
妻 あら、これちようど二人乗りになつてるじゃない。
夫 ちゃんと安全ベルトを締めるんだよ。落ちないように。
妻 バカね。落ちるもんですか。でも思っていたより高いのね。
夫 いいかい、最初はゆつくりと漕いでいくよ。屋根の上から見える町っていい気分だろう。
妻 ほんと素敵ね。なんだか魔法使いになつたような気分。
夫 ほらあの木の向こうの町がメルヘン広場。パン屋さんは白雪姫の七人の小人たちの小屋。みやげ物屋は赤頭巾のおばあさんの家。それにトイレだつて三匹の子豚の家になつているんだ。
妻 道化師や辻音楽師の回りは子供たちでいっぱい。
夫 オルガンに合わせて町の人たちが踊っているよ。
妻 あのレストランやコーヒー店の通りは外国の町並みみたい。
夫 ロンドンのベーカー街だよ。外に立っているのはホームズさんとワトサン博士さ。
妻 冒険広場は西部劇の真つ最中。
夫 USJ ほどじゃないけど、ジェラシックパークも見えるんだ。
妻 あら、どこなこのこは。なんだか静かなところ。
夫 それに、なんだか暗くなつてきたよ。
妻 嫌よあなた、そんなに力いっぱい漕がないで。本当に空の上に飛び出してしまうじゃないの。
夫 いいじゃないか。もしかしたら、僕たちはもう本当に飛んでい

るのかもしいないよ。

妻 怖いわ。あれは何。ほら、月の光の中をこちらにやってくる!!。

夫 空飛ぶ木馬だ。それに魔法のじゅうたんだ。すごいぞ、すごいぞ。僕たちはアラビアンナイトの世界にやってきたんだ!!。

妻 本当。私たち本当に飛んでいるの!

夫 君の傘を広げてごらん。きつとどこまでも飛んでいくよ。

妻 あなたの帽子は、ほら大きな帽子。あれなら私たち、どこまでも飛んでいけるわ。

大きな傘と大きな帽子を取り出して、椅子から立ち上がる二人。それからはじめられたように舞台の上を回り出す二人。手をつないでクルクル回りながら楽しそうに笑い合う二人。

しばらくして遠くから音楽（懐かしい時間を思い出される）が聞こえてくる。

夫 （耳をすまして）あれは何だろう。ほら、聞こえるだろう。

妻 大変。もうおしまい。あなた急いで。さあ、子供たちも急いで。

夫 そうだ。あの音楽が聞こえ出すと遊園地が終わる時間なんだ。

妻 気がついたらもう誰もいなくて、いつも私たちだけになっているの。

夫 急がないと遊園地の門が締まってしまふ。僕たちだけが遊園地の中に残り残されてしまふ。

妻 みんなで走って、そしたら遊園地の人みんな手で手を振ってくれたわ。

夫 そうだ。いつもそうだった。だれかが手を振ってさようならって言うてくれた。門のところで、でもあれは誰だったんだろう。

音楽が遠ざかる。舞台が暗くなる。妻だけがライトの中に残されて独白。

妻 そう、あれは誰だったんだろう。みんなで遊園地に行ったことも、アヒルの池のことも、メリーゴーランドのことも、カモメの艦隊のこともみんな昨日のことに覚えていてるのに、最後のところだけまるで黄昏時の西の空のようにおぼろげにかすんでいる。本当にはあれは誰だったんだろう。私たちが遊園地を後にする時にいつも手を振って見送ってくれた人たちは。

私が次の日曜日、思い出の遊園地の最後の日に出かけたのは、そのことを確かめておきたかったと気持ちも、あったのです。

（溶暗）

舞台が明かるくなると、そこは次の日曜日、二人は思い出の遊園地に来ている。中央に妻が立っている。夫が走りよる。

夫 やつぱり、なくなつたらしいよ。カモメの艦隊は。

妻 (あたりをみながら) 淋しいのね。カモメの艦隊だけじゃないわ。子供たちが楽しみにしていたものがみんななくなつてる。

夫 それに、どうしてこんなに人が少ないんだろう。もう閉園したみたいだ。

妻 一輪車とオルガンは残っていたけど、もう道化師も町の辻音楽師も、誰もいない。それに道化師の服だけが公園の木にかかつていたわ。

夫 ベーカー街ももぬけの空だ。

妻 まるで、ゴーストタウンね。この町は。

夫 みんなどこへ行ってしまったんだろう。

夫が何かを探して舞台の周りを歩き回る。妻が夫の姿を目で追いながら。

妻 あなたは、あの時もそんなふうにして探し回っていたわ。

夫 え、

妻 ほら、子供たちが私たちの前から居なくなつてしまった時よ。

夫 そうだ。子供たちが居なくなつた日、僕は必死になつて探し回つた。

妻 でも子供たちは帰つてこなかった。ハメルンの笛吹き男がやってきて子供たちを連れていってしまったんだわ。

夫 ハメルンの町の子供のように、笛の音に踊らされて行ってしまった。

妻 あなたが悪いのよ。あなたのせいよ。あなたには私や子供たちより大切なものがあつた。あなたのせいで私の大事な子供たちは行ってしまったんだわ。

夫 。

妻 いいえ、違うわ。私が悪かつたんだわ。私たちが子供たちを理解できなかったから、あの子たちは行ってしまったんだわ。私の夢をあの子たちにおしつけたのがいけなかつたんだわ。

夫 違うよ。誰も悪くなんかじゃないさ。子供たちはもう僕たちの腕の中から飛び立つ時が来ただけなんだ。みんなそうさ。いつかどの子もハメルンの笛吹き男に連れられて、山のむこうに行く時がくるんだ。

妻 あなたはいつもそうよ。なんでも理屈で片付けてしまつ。あなたは淋しくはないの。もう道化師も辻音楽師も私たちは見ることができないのよ。

夫 僕だつて淋しいさ。もう僕たちはメリーゴーランドもかめの艦隊に乗ることもできない。

妻 そうね。もう私たちはこの遊園地には帰つてこれないのね。

夫 そうだ。もうすぐ門が閉まつてしまふ。それまでに僕たちは僕たちの家に帰らなければ。

突然鐘の音が鳴り出す。それは時を告げる鐘のようでもあるし、荘厳な教会の鐘の音のようにも聞こえる。舞台の中央で驚いて鐘の音を聞いている二人。やがて、鐘の音が遠ざかつて、あの懐かしい音楽に代わる。それはいつも遊園地が閉まるときの合図の音楽。そして二人が子供たちと一緒に家路につく時の音楽。

妻 ほら、聞こえてきたわ。

夫 聞こえてきた。僕にもはっきりと聞こえてきたよ。

妻 私たちも行きましょう。

夫 あれは何というところだつたんだらう。いつもこの音楽が聞こえてきたら急いで僕たちは行つたんだ。

妻 夕日通り。確かそんな名前だつたんじゃないか。

夫 そうだ。サンセット通りだ。でも、もうあの人たちはいないんだらうな。ほら、いつも僕たちが帰るときに見送ってくれた人たち。

舞台が黄昏にそまつて、やがて妻の姿だけを残して明かりが落ちていく。

妻 そうなんです。サンセット通り。この遊園地の出口に導く静かな外国の町のような通りはそんな名前がついていたはずです。ペンキのはげた家々のドア。ガラスの割れた窓、二階のテラスはテスリが腐つて半分崩れ落ちて、そう、ここもあの頃の光は失われてまるでゴーストタウンのようになっていましたけど、不思議なことにはここだけはあの頃と変わっていないように私には思えました。私はあの人たち、サンセット通りの人たちの姿を捜しました。でも。もう三十年も前のことなんですもの、あの人たちがここにいてなんて本当にありえないことなんです。私はいつか夫や子供たちと歩いた道を懐かしむようにゆっくりと歩いていました。その時です。まるで南国の家のようなしゃれたテラス

のある家の二階の窓が開いて、女の人が出てきたと思うとヒラヒラとハンカチを振っているではありあせんか。まるでそれが合図のように、となりの家の扉からは男の子と女の子が飛び出して手を振ったり、ある家のベランダにはおばあさんが出てきてここにこ笑っているのです。私ははつきりと思い出しました。そうだった。貴方たちはお人形だったのね。そして三十年前とおんなじように私を見送ってくれるのね。でもみんなペンキの色は剥げ落ちて、ところどころ壊れているけど、でも元氣そう。長い間ご苦労様。貴方たちも今日が最後でしょう。私はもう一人になってしまったけれど、貴方たちのことは忘れない。本当に、本当に、長い間ご苦労さま。

舞台に明かりが入ると、そこは元の夫婦の居間。しかし椅子は一つしかおかれていない。そして、ゆっくりと妻がその椅子に腰を降ろす。明かりが静かに落ちていく。

(幕)